

作品とその周辺

有元 容子

2011年は3月11日に東北で未曾有の大震災があり、我々芸術関係の者も多大な影響を受けた。

しかし、この震災は、私を含めて多くの芸術に携わる人々へ大きな警鐘となった。

なぜ、絵を描くのか、なぜ音楽をやるのか、という作ることの根源的な意味を考え直す良いきっかけとなったのではないかと思う。私自身もしばらく制作が中断したまま何ヶ月も進まない状態であった。

しかし、人々の心の中で求めている、美しいもの、気持ちのよいもの、心慰められるものは普遍で、逆境にあるからこそなお必要なのだ、ということに思い至った。こんな時だからこそ、やらなければならないのである。

さて、ここ何年かずっとテーマに描き続けている、四国の風景、海と山の作品で、4月の初めに国際フォーラムでの「アートフェア東京」に参加する予定であったが、結局被災者の宿泊施設として会場を提供するという事で、無期延期となった。

ようやく7月28日から4日間アートフェアが開催され、作品の展示をすることが出来た。

作品は、日本画作品と、陶芸作品の2種類である。

日本画は、前出の四国の風景である。この何年かずっとテーマに描き続けているものである。以前は登山するということが出来たのだが、最近はあまり出来ないでいる。と言うのも、山を麓から描くのではなく、もっと高い所から描いたものはあまりないので、それを実はずっとやって来ていた。

時間の制約もあり、あまり高い所へは行けなかったのが残念であるが、四国山地は割に山へ入って行き易かったのは幸いだった。

そして、海と島の風景を描くことも私の中では大変重要なことであった。

海と島は私の原風景でもあることから、多くの作品を描きたいと思っているし、描いて来ている。

今回は、陶芸作品にもそれを表現してみた。

これは、工場の形をした香炉であるので、お香を焚くと、煙突から煙が出るようになっている。

当初、ろくろでの制作を試みてみたのだが、却って形がきちんとならないので、他の方法を考えた。結局、粘土の板を組み合わせ、今の形とした。

工場は私の生まれた島なのだが、島自体が銅の精錬工場であったので、子供の頃の日常的な風景であった。今では、銅鉱石の産出が終わり、工場はほぼ閉鎖状態となり上陸すら出来ない。

長年この島を描いてみたいと思っていたが、難しくて出来ないままであった。今回、このような形での表現が出来て、良かったと思っているし、又今後別の形でも挑戦したいと思っている。

今回、このアートフェアへの出品作を含め、今年制作した作品の中から選んだものを出してみた。

2011年10月









